



吉良家二代の手紙

新史料発見話 1

タテ三八・〇×ヨコ五二・三

【史料③】(延宝二年(一六七四))五月十五日「吉良上野介義央追啓」折紙 楮紙

タテ一九・〇×ヨコ四四・二 封紙有

り(史料②と③の文書を納める)

【史料④】(年未詳)十一月十日「吉良上野介義央書状」折紙 楮紙

タテ三六・七×ヨコ五一・〇 封紙有

り

【史料⑤】(年未詳)十二月二十五日「吉良上野介義央書状」折紙 楮紙

タテ三六・七×ヨコ五一・〇 封紙有

り

【史料⑥】(年未詳)十月十八日「吉良若狭守義冬書状」折紙 楮紙

タテ三四・七×ヨコ四九・四 封紙有

り 寛文六年(一六六六)ないし同七

年の発給のもの

書状とは手紙のことで、追啓とは追伸

文のことです。また折紙とは漉かれた紙

(料紙)一紙を横半折にした形状をいい

はじめに

本願寺史料研究所が保管する史料(古文書・日記など)は二十万点に及ぶと考えられています。同研究所では、それら史料の調査、整理を順次行っています。

去年八月中旬、本願寺史料研究所保管史料の中から、赤穂浪士の敵役で有名な吉良上野介義央(「よしひさ」とも)書状四通、吉良上野介義弥(義央祖父)書状一通と、義央に関連する日記記事も確認しました。そして同時に吉良若狭守義冬(義央父)書状(本願寺所蔵)も発見・確認しましたので、併せて紹介しま

す(なお法量はセンチメートルです)。

一 現状と経緯

各文書の法量や形態、通数などは以下の通りです。

【史料①】(寛永十七年(一六四〇))十一月十六日「吉良上野介義弥書状」自筆

折紙 楮紙

タテ三七・三×ヨコ五三・三 包紙

有り

【史料②】(延宝二年(一六七四))五月十日

五日「吉良上野介義央書状」折紙

楮紙

ます。楮紙とは料紙の質で、楮こうぞという木を原料に漉かれた紙をいいます。

封紙は本紙（本来文書を記す紙）を包む紙で、現在の封筒にあたります。したがって封紙は本紙を書いた人物⇨発給者側が包んだものです。一方包紙とは、手紙などもらった側が、後で本紙が損じないように、あるいは大切なものだからという理由で包んだ紙で、手紙などを発給した側が包んだものではありません。

これら文書の発見経緯は、史料②③の義央書状を確認していくうち、史料④⑤の発見につながりました。さらにどこかでこれ以外の吉良の古文書を見ていた記憶があり、それをきっかけに本願寺所蔵文書を調査すると、本願寺に義央父の史料⑥を発見しました。しかし自分の記憶では、史料⑥ではない吉良の文書が研究所に何かあったと思い、再度調査をする

と、今度は義央祖父の史料①を発見することができました。ここに義央、その父、その祖父という吉良家三代の書状がそろうことになりま

した。この三代が一括所蔵されることはかなり珍しいことです。

二 吉良義弥・義冬・義央概略

次に吉良家三人の概略を説明しておきます。

吉良義弥（一五八六〜一六四三）は義央祖父。江戸時代前期の幕臣。通称上野介。足利一族の三河みかわ（愛知県）吉良家に誕生。慶長五年（一六〇〇）本領三河国幡豆郡吉良荘はすづぐんきらのしやうに三〇〇〇石を封じられます。同十三年幕府儀式典礼を司つかさどる高家となり格式高い処遇を受けました。享年五十八歳。

吉良義冬（一六〇七〜一六六八）は義央父。江戸時代前期の幕臣。高家。通称若狭守。寛永二十年（一六四三）継職して四〇〇〇石を知行ちぎやう。徳川家康への東照しょう大権現神号宣下いんげんせんげ、家光の贈位贈官、家綱將軍宣下などで、朝廷への使いを務めました。六十二歳で死去。

吉良義央（一六四一〜一七〇二）は江

戸前期の幕臣。幼名三郎、通称左近。父は義冬、母は酒井忠吉娘さかいたけよし。祖父と同じ上野介を称しました。祖父以来高家を務め、

寛文八年（一六六八）に家督継承、四二〇〇石を知行ちぎやう。元禄十四年（一七〇一）三月十四日、江戸城中で赤穂藩主浅野長矩あさのながたかに斬りつけられ負傷、同年隠居。翌十五年十二月十四日、長矩旧臣（赤穂浪士）らの討ち入りで殺害されます。六十二歳。吉良家を継いだ義周よしゆきは翌年改易かいえきされ、吉良家は断絶しました。義央は世間的には悪役として喧伝けんでんされますが、三河国幡豆郡吉良地方では、築堤ちきていや塩の生産、新田開発などの功績により、名君と評価されています。

三 史料には何が書いてあるか

ここでは発見された各史料にはどのようなことが書いてあるか、その大意を示しておきます。

【史料①】 内容は吉良義弥から本願寺坊

官下間仲此・奉行八木藏人周へ宛てた書状です。春日局に仕える医師玄利の母親が本願寺におり、局の消息を持たせ、その者を上洛させるので、本願寺側で会わせてもらいたいという、局の願いを義弥が本願寺に説明したものです。春日局の母性を感じさせるとともに、プライベートな件を幕府高官に命じるといふ、局の幕府での権力者としての一面をうかがわせる貴重な文書です。

【史料②】 内容は義央実子第四代米沢藩主上杉喜平次の姉（義央実子、喜平次養女）と、第三代薩摩藩主島津綱貴との婚姻が幕府より許可されたことに、祝儀を贈った本願寺第十四代寂如宗主（一六五一〜一七二五）への礼状です。

【史料③】 吉良義央から本願寺坊官下間仲令への追啓です。内容は、義央が將軍の伊勢神宮代参を務め、四月十日に江戸へ帰府し、將軍徳川綱吉に、代参報告をしたことを伝え、この上洛の時に、寂

如宗主より松坂（松阪市）まで、手紙と贈品を頂いたことへの礼を述べたものです。

【史料④】 吉良義央から本願寺坊官下間氏に宛てた書状です。本文書は差合（差し障り・遠慮すること、忌中のこと）について、寂如宗主より受けた丁寧な手紙に対し、忌明け（義央の関係者死去の忌明け）後に、義央が宗主へ送った礼状です。

【史料⑤】 吉良義央から本願寺坊官下間氏に宛てた書状です。内容は義央が取り次いだ嘉例の將軍徳川綱吉への歳末祝儀進献について、老中が首尾よく披露を遂げことを寂如宗主に伝え、さらに自分（義央）へも時服代白銀五枚を賜った礼を述べたものです。

【史料⑥】 内容は寺領安堵の朱印状拝領への礼として、寂如宗主が將軍家綱へ贈った品の取り次ぎを、息子義央が首尾よく披露を遂げたことなどを義冬が伝え

たものです。なお発給年は未詳ですが、寛文六年（一六六六）あるいは同七年のものです。

四 日記にみえる 吉良上野介義央

また吉良義央書状にしたがい、研究所保管の【史料⑦】「長御殿御日次之記」を調査したところ、義央は上洛した時、本願寺へ来山することが多く、その具体的様子を記す記事も新たに確認しました。

長御殿は坊官・奉行衆などが執務する本願寺の中核的役所で、「長御殿御日次之記」はその役所の日記です。本日記で義央の記事が確認できるのは、寛文十二年（一六七二）／寛文十三年（一六七三）、延宝元年／延宝三年（一六七五）／延宝四年（一六七六）／延宝五年（一六七七）です。このなかで義央の確認できる早い記事は、寛文十二年正月二十六日に、上洛した義央の使者が本願寺に來た記事です。

宗主は翌二十七日に義央宿所を訪れ、二

月二日、義央が本願寺を訪問し、宗主と書院で対面しています。二月五日、宗主は義央に黄金一〇両を遣わしました。さらに二月六日、江戸帰府時、義央が大阪へ到着すると、宗主はわざわざそこまで使いを送り、茶・菓子を遣わす念の入れようです。以降、義央が上洛時にたびたび本願寺を来訪する記事がみられます。

延宝四年二月四日条には、宗主が義央方へ見舞状と六字名号一幅を礼として贈る記事が確認できます。礼としての名号授与は大変珍しいことです。

義央は赤穂浪士事件で有名ですが、重要な高家の活動は意外に知られていません。しかしこのように本日記から、上洛した義央の高家としての活動の一端がわかります。本日記はその空白を埋めることのできる研究の一助となるでしょう。

また寂如宗主が義央にかなりの気遣いを見せるのは、高家が語ることは將軍に伝わり、語られた内容如何によつては、本願寺が大きなダメージを受けると考え

ていたからでしょう。

五 発見は続く

実はこの発見話には続きがあります。祖父義弥書状には、三代將軍徳川家光乳母春日局（お福）よりの依頼話が記されていました。春日局の話が古文書に表れること自体珍しいことであるのに、その中に局みずから書いた「文」（消息）を本願寺に渡したとあったのです。つまり幕府初期に大奥整備や幕政に発言力を持った局の消息が現存する可能性が出てきたのです。

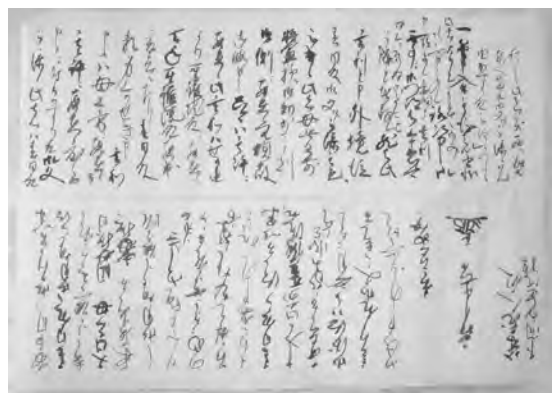
史料研究所ではその消息現存の可能性を信じ調査した結果、その自筆消息も発見することに成功しました。このような局の消息が伝来していたことは大きな驚きであるとともに、地道な調査の必要性を強く物語る今回の発見となりました。

（以下、次号）

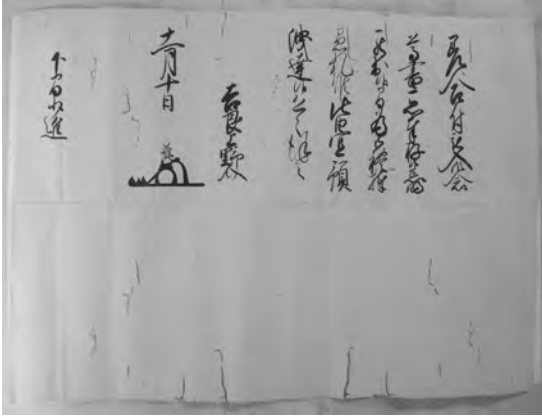
（本願寺史料研究所上級研究員 大喜直彦）



【史料②】（延宝2年〔1674〕5月15日「吉良上野介義央書状」



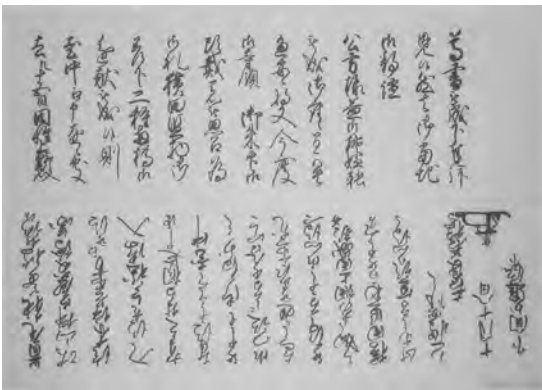
【史料①】（寛永17年〔1640〕11月16日「吉良上野介義弥書状」自筆



【史料④】（年未詳）11月10日「吉良上野介義央書状」



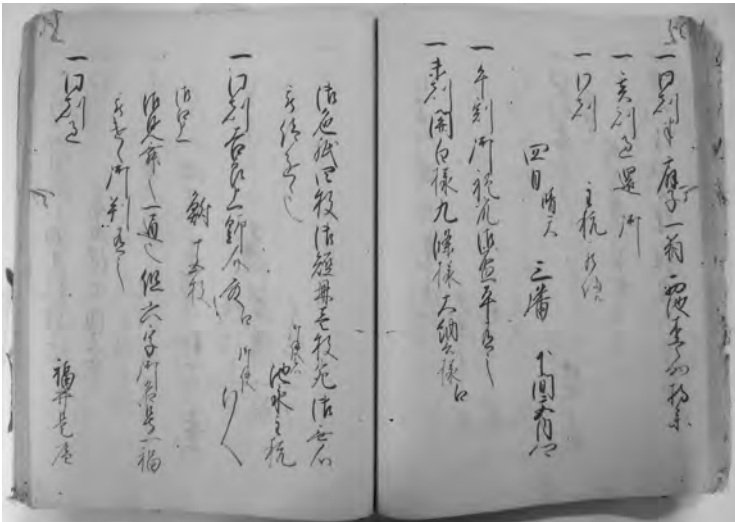
【史料③】（延宝2年〔1674〕）5月15日「吉良上野介義央追啓」



【史料⑥】（年未詳）10月18日「吉良若狭守義冬書状」



【史料⑤】（年未詳）12月25日「吉良上野介義央書状」



【史料⑦】「長御殿御日次之記」延宝元年表紙（右）及び延宝4年2月4日条（左）

